

トビウオ通信 (R6 第9号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)

<https://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《令和6年夏の漁況を振り返って》

島根県の夏の漁業として代表される、ばいかご漁業、しいら漬け漁業、とびうお漁について、令和6年夏の漁況を振り返ります。

※文中の「平年」は過去5年平均値（平成31年～令和5年）となっています。

ばいかご漁業 1隻当たり漁獲量 平年並み

石見地域のばいかご漁業は小型底びき網漁業の休漁期（6月～8月）に、日御碕沖から浜田沖の水深200m前後の海域で操業されています。

今期のばいかご漁業における総漁獲量は82.7トンで平年（84.5トン）並み、1隻当たり漁獲量も27.6トンで平年（28.2トン）並みでした。漁獲の主体のエッチュウバイ（地方名：白バイ）が78.4トンで94.8%を占めていました。

平成10年～平成20年にかけては、エッチュウバイの漁獲量は60トン～120トンの間で大きく変動していましたが、平成21年以降は一部を除いて50トン～70トンの間で概ね横ばいとなっています。その一方で、1隻当たり漁獲量は増加傾向にあり（図1）、現在のエッチュウバイ資源の状況は良好であると推定されます。

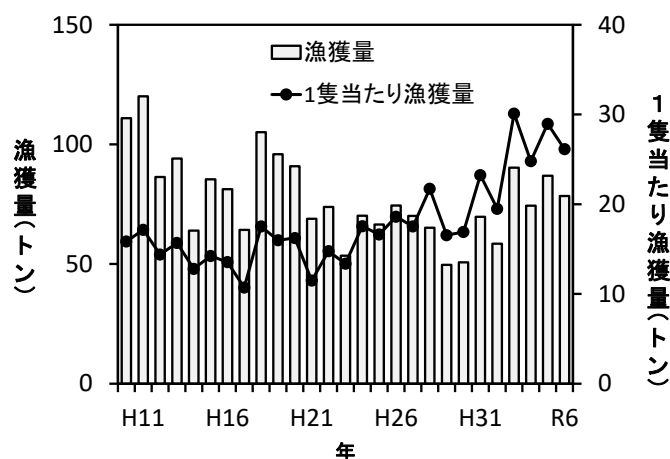


図1 石見地域のばいかご漁業におけるエッチュウバイの漁獲量および1隻当たり漁獲量の推移

あなごかご漁業 1隻当たり漁獲量 平年を下回る

島根県ではアナゴ類の漁獲量が全国トップクラスで、アナゴ類は底びき網漁業によって最も多く漁獲され、次いで、あなごかご漁業で漁獲されます。あなごかご漁業はアナゴの習性を利用して、アナゴの活動が活発になる夜間に餌を入れた漁具を設置して漁獲します。本県では、主に小型底びき網漁業の休漁期（6～8月）に石見地域で行なわれます。

今期の石見地域におけるアナゴ類の水揚げ状況は、総漁獲量が12.9トンで、平年（25.8トン）の5割でした。1隻当たり漁獲量は6.5トンで平年（9.5トン）の7割でした（図2）。

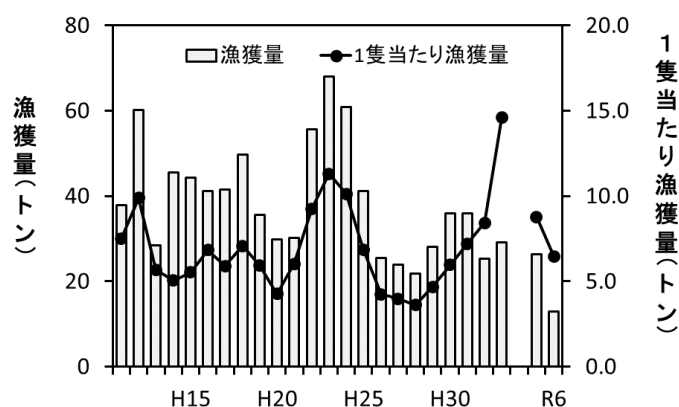


図2 石見地域のあなごかご漁業の総漁獲量および1隻当たり漁獲量の推移

※R4のデータは非公開

しいら漬け漁業

1 隻当たり漁獲量 平年を下回る

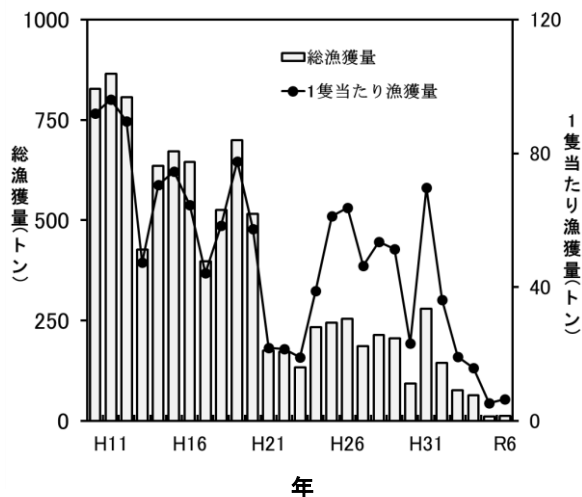


図 3 石見地域のしいら漬け漁業の総漁獲量および1隻当たり漁獲量の推移

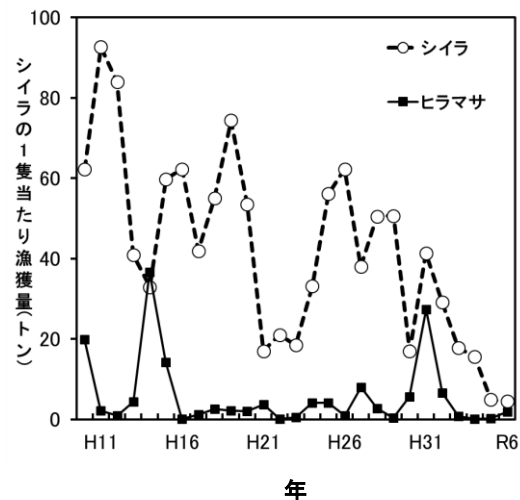


図 4 石見地域のしいら漬け漁業のシイラとヒラマサの1隻当たり漁獲量の推移

シイラ等の回遊魚は物陰に寄り添ったり、集まったりする習性があります。この習性を利用した漁法がしいら漬け漁業で、漬木（つけぎ）と呼ぶ竹の筏を海面に浮かべ、筏の影に集まった魚を網で漁獲するまき網の一種です。本県では、主に小型底びき網漁業の休漁期に石見地域で行われます。

今期（6月～9月）の石見地域における水揚げ状況は、総漁獲量が13.2トンで平年（115.1トン）の1割、1隻当たり漁獲量は6.6トンで平年（29.3トン）の約2割となりました（図3）。

魚種ごとの漁獲動向をみると、シイラの1隻当たり漁獲量は4.5トンで、平年（21.8トン）の2割となりました。シイラの漁獲量は令和元年以降、減少傾向となっています。また、ヒラマサの1隻当たり漁獲量は2.0トンで、平年（7.1トン）の3割となりました。ヒラマサの漁獲量は平成14年に36.7トンの漁獲があった以降、令和元年を除き低調に推移しています（図4）。

とびうお漁

漁獲量 平年を下回る

トビウオ類は、初夏になると産卵のため山陰沿岸に回遊してきますが、県下全域で刺網、定置網、船びき網、まき網などの様々な漁法により漁獲されます。本県で漁獲されるトビウオ類は、主にホソトビウオ（地方名：丸アゴ、丸トビ、小目）とツクシトビウオ（地方名：角アゴ、角トビ、大目）の2種類です。

今期（5月～8月）におけるトビウオ類の総漁獲量は122トンで、平年（421トン）を下回り、平成21年以降、最も不漁となりました（図5）。また、地域別の漁獲量は、出雲地域が83トンで平年（280トン）の3割、石見地域が21.3トンで平年（88.2トン）の2割、隠岐地域が17.0トンで平年（52.2トン）の3割の水揚げでした。

主な漁業種類別の漁獲量は、定置網が97.3トン、まき網が5.8トン、刺網が3.9トン、船びき網が11.9トンでした。また、魚種別の漁獲量は、ホソトビウオが72.7トン、ツクシトビウオが48.8トンで、漁獲量の6割がホソトビウオでした。

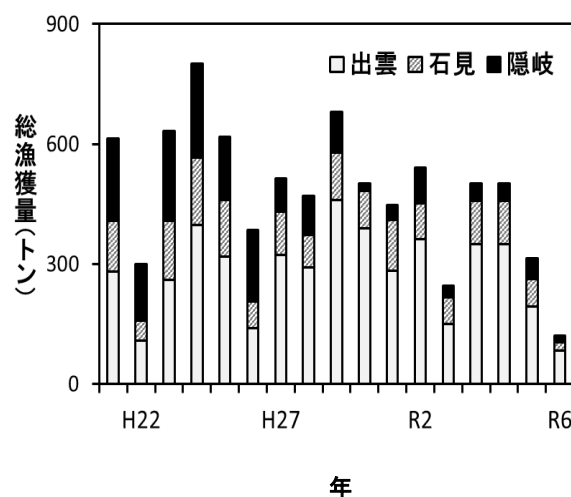


図 5 トビウオ類の地区別漁獲量の推移（5～8月集計）